

人権一般に関する間接的指導

第4学年国語科学習指導案

1 単元名 叙述を基に気持ちの変化を読みとろう ～ごんぎつね～

2 単元の目標

- (1) 気持ちの変化をとらえながら、物語を読むことに関心をもち、読みとったことを友達と話し合ったり、進んで巻物にまとめようとしていたりしている。
(国語への関心・意欲・態度)
- (2) 登場人物の気持ちの変化について、友達と意見を交流することができる。
(話すこと・聞くこと)
- (3) 物語の感想を自分の言葉で書くことができる。
(書くこと)
- (4) 登場人物の会話文や行動描写に即しながら、場面と場面を関連付けて考え、登場人物の気持ちの変化を読みとることができる。
(読むこと)
- (5) 会話文や行動描写の言葉には、登場人物の考えたことや思ったことが表されていることを理解することができる。
(言語についての知識・理解・技能)

3 単元観

(1) 学習指導要領との関連

本単元は、学習指導要領第3学年及び第4学年の目標「C 読むこと」に基づいて設定したものである。

C 「読むこと」

(1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。

ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。

〔言語活動〕(2)

ア 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。

指導要領の解説では、「叙述を基に想像して読むこと」を、『フィクション（虚構）による世界が描かれている物語や詩の描写を、想像力を働かせながら読むことである。叙述を基に、それぞれの登場人物の性格や境遇、状況を把握し、場面や情景の移り変わりとともに変化する気持ちについて、地の文や行動、会話などから関連的にとらえていくことをねらっている。その際、自分を取り巻く現実や経験と照らし合わせて物語の世界を豊かにかつ具体的に感じ取ったり、そこから感じ取った感想や感動を大切にしたりすることが必要である。』とある。

また、「感想を述べ合う言語活動」として、『感想を述べ合ったら、自分の感想が、友達の感想とくらべてどのような特徴をもつのかを認識させていくことが大切である。』とある。

(2) 児童の実態

これまでに児童は、様々な物語文に触れ、登場人物に感情移入をしながら読んできている。また、場面ごとに区切って読むことで、構成についても理解が深まっている。しかし、その読みとりには、まだ断片的、直観的、感覚的なものが多く、根拠を文章中に見つけるという点においては充分とは言えない。また、授業中の話し合い活動においては、一部の児童の発言で学習が進み、ややもすると他の児童は受け身になってしまう姿も見られる。

(3) 指導観

本単元では、行動描写や会話文（独り言）に焦点を当て、その叙述を基に主人公であるごんの気持ちの変化について、兵十の言動との関連性に注目させながら読みとらせたいと考えた。

そのための手だてとして、①「叙述に書きこみをした上で、互いの意見を交換し合う活動」

と②「ごんの気持ちの変化を巻物に表す」活動を位置付けた。①については、自分の読みと友達の読みを比較することで、主体的に深い読みができるようになると考えた。②については、場面と場面を関連付け、ごんの気持ちを心情曲線や場面絵を取り入れながら一つの巻物に表していくことで、気持ちの変化が明確にとらえやすくなると考えた。

また、物語の終末においては、視点人物であるごんだけでなく、真実に気づいた兵十の気持ちを、叙述を基に読みとる活動を取り入れた。この活動を通して、人物と人物の関係性や気持ちの絡み合いに着目させ、「相手に自分の思いを伝えることの難しさ、相手の気持ちを受け止めることの大切さ」について気づかせたい。

さらに、発展学習として、巻物を基に親子で語り合う機会を計画した。親子で一つの物語に対して感想や思いを交流し合うことで、自分の学びをまとめたり、発信したりする力を高めることができると考えた。

4 指導計画 12時間

	時	主な学習活動
一次	1	物語を読んで、学習計画を立てる。
	2	物語の概要をとらえ、事件の要点を簡単にまとめる。
	3	話を3つに分け、全体像を巻物に書く。
	4	第1・2・3場面に書き込みをする。
	5	第4・5・6場面に書き込みをする。
二次	6	第1場面について話し合う。(グループ→全体) いたずらをするごんの気持ちを読みとり、巻物に書き入れる。
	7	第2場面について話し合う。(グループ→全体) いたずらを後悔するごんの気持ちを読みとり、巻物に書き入れる。
	8	第3場面について話し合う。(グループ→全体) 兵十への償いの気持ちを読みとり、巻物に書き入れる。
	9	第4・5場面について話し合う。(グループ→全体) ごんの兵十に気づいてもらいたい期待と気づいてもらえない不満を読みとり、巻物に書き入れる。
	10	第6場面について話し合う。(グループ→全体) 兵十に撃たれて、うなずいたごんの気持ちを読みとり、巻物に書き入れる。
	11	第6場面について話し合う。(グループ→全体)
	本時	ごんを撃った後、火なわじゅうをばたりと取り落とした兵十の気持ちを読みとり、巻物に書き入れる。
三次	家庭	完成した巻物をもとに、家の人とごんぎつねを読んだ感想を語り合う。
	12	感想を交流し合う。

5 人権教育との関連

本教材では、いたずらばかりするごんの心の奥にある一人ぼっちの寂しさや悲しみについても十分に読み深め、兵十につぐないをしながらなんとか自分の存在を分かってもらおうとするごんの孤独な姿に気づかせたい。その上で、一生懸命相手のことを思っていたことが、相手に通じなかったり、相手の思いが分からなかったりした自分の経験などを思い重ねることにより、人と人がお互いを理解しあうことの大切さを分からせたい。

さらに、一人では生きられないこと、仲間の大切さ・温かさを、ごんの生き方を通して理解し、認め合う集団づくりへの意識を高めていくことは、学級の人間関係を深めていく上で、意義が大きいと考えた。

6年間クラス替えがない本校では、児童同士が、お互いに深く意識しないでもつながっている良さがある一方で、人間関係が固定化されがちで、クラスの中でも相手に対する思い込みによるトラブルも見られる。そこで、兵十のごんへの見方が固定化されていたがゆえに、悲劇が起きたという一面にも着目し、思い込みや偏見をもたずに接することの大切さについて考えさせていきたい。

6 本時の指導

(1) 題目 火なわじゅうをばたりと、取り落とした兵十の気持ちを考えよう

(2) ねらい 「ごんぎつね」の全場面を通した兵十の言動とごんの気持ちの変化を振り返り兵十の気持ちを考えることができる。

(3) 人権教育の視点

ごんと兵十の思いが絡み合わないことから、悲劇が起こったことを兵十の視点から読みとることで、偏見をもたないことの重要性や相手の気持ちを考えることの大切さを考えさせたい。

このことは、本校の人権教育目標中学年感受性②「相手の気持ちを考え、思いやりの心をもつことができる。」及び知性②「外見や意見の違いなどで、偏見をもったり差別してはいけないことがわかる。」につながるものと考えている。

(4) 生かしたい児童

A 児・・・感情の起伏が激しく、相手に自分の思いが伝わらないと、落ち込み、ふさぎ込んでしまう様子が見られる。本時では、ごんの根底にあるひとりぼっちの寂しさに共感させつつ、兵十の思いを考えさせることで、自分の思いを伝えるだけでなく、相手の思いを分かろう、聴こうとする姿勢が大切であることに気づかせたい。

B 児・・・中心となって活動をするのは、あまり得意ではないが、常に相手の気持ちを考えた行動を取っている。ごんの状況を踏まえた上で、多面的に兵十の思いについて考えたことを、意図的に発信させることで、クラス全体に相手の思いを分かろう、聴こうとする姿勢が大切であることに気づかせたい。

(5) 授業の観点

本時以前の学習では、ごんの気持ちの変化を中心に考え、対人物として兵十の言動を確認しながら読み進めてきたが、本時においてはあえて兵十に視点を当てて話し合うこととした。このことが「偏見をもたないことの重要性や相手の気持ちを考えることの大切さ」に気づかせるのに効果的であったか。

(6) 展開

◎人権教育上の配慮 ※学校課題との関連

具体目標	学習活動	教師の支援	資料
○ 前時までの学習内容を振り返ることができる。	1 前時までの学習内容を振り返る。	・ 前時までは、ごんの気持ちの変化を中心に考えてきたこと、そしてその変化のきっかけとなっているのは、兵十の言動であったことを確認する。 ・ 前時までに書いた兵十の心情曲線を確認し、兵十の気持ちの変化やごんの思いに気づいた時の衝撃、後悔を充分に感じられるようにする。	心情曲線 揭示物
○ 学習課題がわかる。	2 本時の学習課題を確認する。 火なわじゅうをばたりと、取り落とした兵十の気持ちを考えよう	・ 今までに作った巻物を見るよう促すことで、最終場面までの兵十の言動やそれに追従するごんの気持ちの変化を想起させ、それをもとに本時の課題を解決できるようにする。	
○ 兵十の気持ちについて話し合える。	3 火なわじゅうをばたりと取り落とした時の兵十の気持ちについて話し合う。 ○ グループで話し合う。 ○ 全体で話し合う。	※自分の意見をワークシートに書き記してから、グループでの話し合いに参加できるようにする。 ◎文章のどこを根拠に考えたのかをペアで確認しても良いことを伝え、自分の意見をもつ一助とする。 ・ 話し合いの観点を確認することで、ねらいに沿った考えで交流できるようにする。 ・ 根拠となる叙述を示して、発言できるよう、書き込みノートや巻物を活用するよううながす。 ・ 前時のごんの気持ちを振り返った上で、「もし自分が兵十の立場だったら・・・」と意図的に自分と置き換えてみるよう促し、境遇や状況を総合的にとらえて考えるようにする。 ※必要に応じて、伝え合い・学び合いカードを活用し、友達の考えを踏まえた上で発言できるようにする。 ・ 考えが似ているもの、違うものに分け、それぞれそう考える根拠を文章の叙述に基づいて説明するようにする。 ◎ごんと兵十の思いが絡み合わないことから、悲劇が起こったことを充分に感じさせ、相手の思いを受け取ろうとする受容的な態度について考えるきっかけとしたい。	ワークシート 伝え合い・学び合いカード
◇具体の評価基準 ・ 物語の終末における兵十の気持ちについて叙述を基に考えることができたか。 おおむね満足できる状況 ・ これまでの兵十の言動をおさえながら、ごんを撃った後の兵十の思いについて複数の根拠を基に自分の言葉でまとめることができた。 【発言・ワークシート】 おおむね満足できる状況に達していないと判断される児童への手立て ・ 兵十の心情曲線を手がかりに、ごんの思いに気づいた兵十の叙述に着目させることで、気持ちの変化を読みとり、自分なりの方法で書き記すことができるようにする。			
○ 兵十の気持ちを巻物にまとめることができる。	4 話し合ったことをもとに兵十の気持ちを巻物にまとめる。		
○ 次時の予告を聞くことができる。	5 次時の予告を聞く。	○ 家族との意見の交流について、話をし、意欲を喚起する。	

7 考察

(1) 兵十の気持ちを検討させたことについて

前時までは、ごんの気持ちについてを中心に考えてきたが、本時においては、兵十の気持ちを中心に検討させた。視点を変えて考えさせたことで、心情の変化についてより深く考えることができていた。

兵十の心情に迫る発問として、「悲劇的な結末を避けるために、兵十はどうすればよかったのだろう。」としたが、「どう考えればよかったのだろう。」としたほうが、更なる気づきがあったのではないか。

兵十の行為がごんに対する先入観や偏見に基づくものであったことを話し合わせることで、それらが時には他を傷つけたり、取り返しのつかないことになったりすることがあることに気がつくことができた。

(2) 心情曲線の活用について

単元の始まりから、ごんと兵十の気持ちの変化について、一枚の紙にまとめ、つなげていった。本時においては、この心情曲線を基にして、ごんと兵十の気持ちを振り返り、検討することができ、有効であった。また、学習の流れが視覚的に分かりやすかった。

(3) 活動形態について

個人→ペア→グループ→全体と段階を踏んで、学習することで、児童が主体となって活動をしていく様子が見られた。人権を尊重している環境づくり、学習ルールの成立、友達の意見を分かろうとする児童の姿勢、グループで助け合う声かけなど、活動そのものにおいても、人権感覚を育てる基盤となっていた。

話し合い活動の中で、学び合いができていた。対話も含めて、これも「人権教育」として、重要な要素の一つであろう。